

## 確認事項

### 1 : 「予言」の意味について

予言の意味について辞書では以下のように定義されており、出版物でも「予言・予告」という表現が使われており、先日確認した内容と間違いは無いと思います。

「未来の出来事や未知の事柄をあらかじめいうこと。また、その言葉。」—『三省堂 大辞林』

ですので、その前提にあるのが「エホバからの預言」であろうと、「聖書の預言解釈」であろうと、未来に起きる事柄を特定して告げる行為は、言語の定義上、全て「予言・予告」となるようです。

### 2 : 協会はどんな「予言」をしてきたのか？

先日も確認をさせていただいた通り、協会は歴史的に以下のような予言をしてきました。

1. 1914年：ハルマゲドンが起きる
2. 1918年：教会が滅ぼされ、何百万人も教会員が死ぬ
3. 1925年：復活が起きる
4. 1940年：(1) ハルマゲドンまであと数ヶ月。(2) ドイツはハルマゲドンで滅びる
5. 1975年：歴史に残る年となる。至福千年期が来る。
6. 1982–1995年：1914年を見た世代が過ぎ去る前に新しい世が来るのが「創造者の約束」。

これらについては、「予言」という言葉の定義を踏まえると、確かに「予言してきた」ということができますが、N兄弟のご意見を考慮すれば、それらが「どのような論調で」語られてきたかを、注意深く吟味する必要があると感じました。

「預言解釈の範疇」だと客観的に認められるためには、そこで語られた言葉があくまで解釈の範疇であることが明記されたり、断定的な言いまわしが避けられている必要があります。逆に、もしもその預言解釈の絶対性が強調され、断定的な言いまわしが用いられた場合は、解釈の域を越えた「予言」と見做されます。これが、聖書的にも、社会的にも通用する常識であることは、兄弟も同意なさる点だと思います。

## 1914年

「ところで、1914年10月についてはどうでしょうか。ラッセルとその仲間たちは数十年にわたり、

異邦人の時が 1914 年に終わることをふれ告げていました。期待は高まっていました。C・T・ラッセルは、ウィリアム・ミラーやアドベンティスト派の幾つかのグループなど、主の再来に関して様々な日付を定めていた人々に批判的な見方をしていました。ところが、以前ネルソン・バーバーとの交友があったころから、聖書に基づく正確な年代計算が存在すること、そしてその計算によると、異邦人の時の終わりは 1914 年であることを**確信**するようになりました。」(『ふれ告げる』60 頁)

「数十年に渡って～ふれ告げていました」「確信するようになりました」とあります。「確信」という言葉の意味は、「かたく信じて疑わないこと」(三省堂 大辞林)です。そして、既に確認をさせて頂いた通り、ラッセルにとって「異邦人の時が終わる」とは、「ハルマゲドンが来て異邦人書国家が滅ぼされる」という意味でした。つまり出版物の説明によれば、ラッセルは、およそ 40 年にわたって、大々的に、たくさんの伝道者を遣わして、「1914 年に異邦人諸国家が滅ぼされる」という予言を、間違いの無い真理として提供してきた、という結論になります。

## 1918 年

「彼らは今や自分たちの前に開かれた予想外の新たな事態に合わせて自分たちの考え方や歩み方を再調整する必要がありました。彼らは西暦 1914 年あるいは 1918 年などという特定の年までではなく、永遠に自分たちの神のために「聖別されて」いたのです。」(『救い』p.117)

「Also in the year 1918, when god destroys the churches wholesale and the church members by millions, it shall be that any that escape shall come to the works of Pastor Russell to learn the meaning of the downfall of "Christianity".」—『終了した秘義』485 頁。

「また、1918 年、神が教会や何百万人も教会員を滅ぼす時、脱出する人々はキリスト教の崩壊の意味についてラッセル牧師から学ぶようになるだろう。」

上記引用箇所では、1918 年という年代が、1914 年と同列に置かれています。また「終了した秘義」では、1918 年に神が教会を滅ぼし、何百万人も教会員が死ぬことが大前提として語られています。それにしても、終了した秘義が出版されたのが 1917 年ですから、その一年後に教会が滅ぼされる、という予言・予告をする、というのは、かなり大胆な予言だと思います。

## 1925 年

「1920 年の "Millions Now Living Will Never Die" (「現存する万民は決して死することなし」という小冊子は、1925 年には、アブラハム、イサク、ヤコブや昔の忠実な預言者たちが[死者の中から]……人間としての完全な状態に戻って来ることを確信をもって期待できる」と述べていました。1925 年には昔の忠実な人々の復活が予想されていただけでなく、油そそがれたクリスチャンがその年に天の報いを受けることを期待していた人もいました。1925 年は過ぎて行きました。中

には、希望を捨てた人もいました。」(『ふれ告げる』1993年、p.77)

「確信をもって」という表現がまた用いられていますので、これについても、極めて断定的に予言されていたことが伺えます。

## 1940年

「ドイツの国民は、立たされた苦境に目覚め始めている。・・・彼らは、近い将来もたらされるもの、急いで訪れようとしているものに対して、不安に満ちている。それはつまり、全能の神の大いなる戦い、ハルマゲドンである。」(『慰め』1941年10月29日号、11頁)

「主はハルマゲドンの前の残りの数ヶ月に最も効果的な仕事のための道具を提供しました。」—『のみの塔』1941年9月15日号、288頁。

ここでも、ハルマゲドンが数カ月後に来ることが、預言解釈による一つの可能性として示されているのではなく、ハルマゲドンが数カ月後に来ると、ということが前提として話しが組み立てられています。ちなみに、先日お見せしようとした本に「Children」というのがありますが、その本の内容は、ハルマゲドンが近いという前提で、話の内容が組み立てられているようです。

## 1975年

1975年が断定的に示されたかどうかは、先日N兄弟との間で議論の焦点となった一つのポイントでした。ですので、この点を改めて確認してみました。

「「神の主権」大会にぜひ出席してください!

「1975年は、間違いなく、非常に意義のある興味深い出来事のあった年として歴史に残る年となるでしょう。そうした出来事の中には、4日間にわたるエホバの証人の「神の主権」地域大会があります。この大会は出席した人々にとってとりわけ長く記憶に残るものとなるでしょう。」(塔75年7月15日号、p.448)

「1975年は、間違いなく・・・歴史に残る年」とあります。「間違いなく」という表現は、誤りの余地が全く無い、ということの意味しています。また、「歴史に残る年」が実際には何を意味するのかについては、当時のエホバの証人にとって説明不要だったはずです。

「前述の証拠があるにもかかわらず、至福千年期が実際に近づいたこと、そうです、わたしたちの世代のうちに始まることを確信させられるに足る「しるし」を要求する懐疑的な人は少なくありません。わたしたちは、イエス・キリストがメシアであることを確信させられるに足るしるしをイエス・キリストに求めた、19世紀前の律法学者やパリサイ人のあの「邪悪で姦淫の世代」の者ではありません。」(マタイ 12:38, 39)。(『千年王国』1974年、p.162)

ここでは、至福千年期が近づいたことを信じない人々は「不信仰」であると断定的に語られています。では、その千年期はいつ到来することが教えられていたのかについては、次のような記事が一つの例として挙げられます。

「しかし、神を恐れ、聖書つまり古代のヘブル語聖書とクリスチャン・ギリシア語聖書の双方を研究する人々にとっては、はるかに重要な別の千年期が近づいています。それは第七千年期です。それは西暦元年から数えて第七千年期ではなく、人間が地上に存在して以来の第七千年期、つまり、神が完全な人間男女をエデンの園で創造された時を起点とした第七千年期です。これは普通、世界紀元つまり「世界が始まってからの年」として数えられます。ここで世界とは人類の世界をさしています。

38 このことは一千年の平和もしくは平和の千年期が近づいていることと関係がありますか。明らかに関係があります！」（『ものみの塔』1970年1月1日号、14頁）

以上の記事から、明らかに統治体は、1975年に至福千年期が来ることを世界中の信者に示し、またその予言に信仰を持つよう繰り返し励ましてきました。これが予言であることは、もはや否定できないレベルであり、ライブラリーで探せば、まだまだその証拠は出て来ると思います。

## ～1995年：創造者の約束

これは、先日兄弟が、「予言」であることを最後まで否定された箇所でしたので、特に改めて確認する必要があると感じました。まず出版物を改めて引用します。

「本誌は、1914年の出来事を見た世代が過ぎ去る前に平和で安全な新しい世をもたらすという、創造者の約束に対する確信を強めます。」（『目ざめよ！』1982年4月8日号～1995年10月22日号、p.4「目ざめよ！誌が発行される理由」）

この文章では、「～～という創造者の約束に対する確信を強めます」とあります。つまり、それが「エホバの約束」そのものであり、それだけでなく「その約束に対する『確信』を強めるのが本誌の発行目的」だとされています。

そして、その創造者の約束が何であるかについて、目ざめよ！誌は、全く曖昧にはしていません。それは「1914年の出来事を見た世代が過ぎ去る前に平和で安全な新しい世をもたらす」という内容です。

1914年を見た世代の最小年齢を年歳とするかについては、協会は歴史的に様々な解釈を提案してきたのだと思いますが、あまりに小さい子供をそれに含めるのは不自然ですから、ユダヤ的・その他の異邦諸国一般の常識と照らし合わせても、10歳くらいが限界だと思います。（ここからの一連の年齢の設定は、あくまでざっくりとした設定です）

次に、世代が過ぎ去る最高年齢ですが、イエスが「世代」というある程度まとまった人数を示した以上、その「世代の人々」がある程度生きている間に、それが起こると考えるのが最も自然な解釈だと思われ

ます。たとえば、イエスがユダヤ人の宗教指導者に向かって裁きが望むと断言した「この世代」の場合、その世代の人々の大多数が生きている紀元70年に、その滅びがやってきました。

「こうして、義なるアベルの血から、あなた方が聖なる所と祭壇の間で殺害した、バラキヤの子ゼカリヤの血に至るまで、地上で流された義の血すべてがあなた方に臨むのです。36 あなた方に真実に言いますが、これらのことすべてはこの世代に臨むでしょう。」(マタイ23章)

以上のことを踏まえると、世代の平均最高年齢としては、80歳くらいが限度だと思われます。それは、平均寿命が世界で最も高い日本人でさえ、平均が80歳くらいだからです。すると、1914年の時点で10歳だった子供が80歳を過ぎる年代は、1984年となります。統治体の解釈では、最低年齢をもっと引き下げたり、最低年齢をもっと上げたりしたのですが、それを考慮してプラス10年を足しても1994～5年くらいが限界です。

ですので、以上の計算を整理すると、目ざめよ！誌の予言の内容は、「1995年くらいまでに平和で安全な新しい世をもたらすという、創造者の約束に対する確信を強める」と定義できます。これは特定の年代に終わりが来ることを述べてはいませんが、「特定の年代までに」終わりが来ることを示した立派な年代予言だとしか、私には思えません。

「純粋に人間的な見地からすれば、1914年の世代が姿を消す前に、これらの出来事が生ずることはとてもあり得ないと思えるかもしれません。しかし、1914年の世代に影響を及ぼす予告された出来事のすべての成就是、比較的遅い、人間の行動にかかってはいません。「すべての事が起こるまで、この[1914年の]世代は決して過ぎ去りません」というのがキリスト・イエスを通して与えられたエホバの預言の言葉です。(ルカ 21:32)そして、靈感による、信頼の置ける預言の源であるエホバは、比較的短い期間に、み子の言葉の成就をもたらされます。—イザヤ 46:9, 10; 55:10, 11。」(塔 84年 10月 1日、p.23)

この説明文においては、「エホバの預言の言葉です」と明確に示されています。そして、その言葉の中には、「1914年の」という聖書には無い言葉が挿入されています。もちろん、M兄弟の言う通り、その年代が挿入された経緯はあるのですが、1914年という起点を創造者の約束に挿入したために、創造者の約束が果たされない、という結果に終わっていることは否定できないと思います。

結論をまとめると、過去の6回の予言において、そのほとんどが「確信をもって」「間違いなく」という論調で断定的に語られたことがわかんと思います。ですので、これは特定の予言解釈を絶対化したために生じてきた「誤った予言」だった、ということになると思います。

以上の点、私の理解に、非聖書的・非常識的な点があれば、ご指摘いただけますか？

### 3：それは「エホバの名」による予言だったのか？

次に、それらの予言が、エホバの名によってなされたと言えるのかどうか？ちゃんと確認する必要がありますが

ると思います。この点は、先日 N 兄弟が否定された点でしたし、以下の協会の説明でも、それは否定されています。

「エホバの証人がイエスの二度目の到来を切望するあまり日付を示唆し、あとで間違いであることが分かったことが何度かあります。このため、ある人々はエホバの証人を偽預言者と呼んできました。しかし、これらの出来事のうち、証人たちがあえて『エホバの名において』予言したことは一度もありません。また、『これはエホバの言葉である』と言ったことも一度もありません。エホバの証人の公式機関誌である「ものみの塔」誌は、「我々には預言の賜物はない」（1883年1月号[英文]、425ページ）、「我々は自分たちの著作を崇めたり、絶対に正しいものとみなしたりはしない」（1896年12月15日号[英文]、306ページ）と述べています。」（目93年3月22日、p.4）

そこで、どんな状況であれば、ある行為が「エホバの名によって」行われたと、みなされるのか？出版物から調べてみましたが、以下のような記事が出てきました。

み名を汚すこと 証拠の示すところによれば、神の名はエデンの園での出来事によって汚される前まで、そのように重視されていました。ですが、サタンの反逆により、神の名声は疑問視されるようになりました。サタンはエバに対して、『神が知っている』事柄を告げる点で神に代わって話しているのだと主張しながら、同時に善悪の知識の木に関してアダムに述べられた神のご命令に疑いを投げ掛けました。（創 3:1 - 5）アダムは神により任命されており、神が人類に指示を伝達する経路としての地的な頭だったので、地上におけるエホバの代表者でした。（創 1:26, 28; 2:15 - 17; コリ 11:3）そのような資格で仕える人たちは、「エホバの名において仕え」、「エホバの名によって語る』とされています。（申 18:5, 18, 19; ヤコ 5:10）ですから、アダムの妻エバが不従順によりエホバのみ名をすでに汚していたとは言え、アダムがそうすることは、自分が代表していた方のみ名に対する、とりわけ非難されるべき不敬な行為でした。—サム 15:22, 23 と比較。』（『洞察1』403頁）

ここで、アダムは「エホバの名において仕え」、「エホバの名によって語る」存在だったと説明されていますが、その理由は、アダムが「神から任命され」「神が人類に指示を与える伝達経路」であり、「地上におけるエホバの代表者」だったからでした。さらに、参照聖句によれば、「エホバの名」によって語ったと見做される人物は、モーセなどの預言者や、ヤコブなどの使徒たちにまで及びます。

これは、現代において、神の前における統治体の立場として説明されている内容と全く変わりません。組織の説明によれば、統治体は「神から任命され」「神が人類に指示を与える唯一の伝達経路」であり、「地上におけるエホバの代表者」であるはずですが、したがって、統治体によって行われるあらゆる活動は、自動的に、「エホバの名」によって行われた、と見做されます。それが、この洞察の説明が明白にしている点です。

ですから、洞察の説明に従えば、協会が歴史的に外してきた予言は、「エホバの名」によって行われたものではないでしょうか？

※また、統治体は、自分たちがエホバからの唯一の経路だと説明し、それを信じるよう信者に教えてい

ます。ということは、その統治体が、ある事柄を断言した場合、信者には、その断定された事柄を「神の言葉」として見る以外に選択肢がありません。実際に、私が会ってきたエホバの証人の兄弟姉妹たちは、皆そういう理解を持っています。もし否定すれば、不信仰と見做され、最悪の場合排斥されます。つまり、その断言された言葉が持つ効力は、旧約の預言者が「エホバの言葉」として提供した預言の持っていた効力と、実際には変わるところがないと思います。

## 4：予言の失敗があっても、全体としては大きな問題ではないのか？

次に、予言の失敗があったとしても、協会がいかにエホバの名に誉れをもたらしてきたのかを考えれば、そう大したことではない、という考えについてです。つまり、兄弟が指摘されている通り、全体を見る、という点についてです。

まず、現時点では、私は三位一体の否定や霊魂不滅の教理の否定については、はっきりとそれが正しい、と言える状況ではありません。しかし、ここでは協会が歴史的に主張してきたそれらの教理が正しいという前提で確認を進めたいと思います。

どのような物事の見方が正しいのかという点については、私は組織から「聖書を土台として考えるべきだ」と教えられてきました。そこで、聖書中で、エホバの名に大きな誉れをもたらしてきた人物が、失敗をした時に、エホバがどのように扱われたかを確認してみることにしました。

### モーセ

---

モーセはエホバの名に際立って誉れをもたらした人物ですが、彼は生涯において、少なくとも二つの誤りを犯しました。一回目は、エジプトに向かっていく際に、自分の息子に割礼を施していなかった、ことです。この時、エホバの懲らしめが下り、モーセは死にそうになりました。急いでミリアムが割礼を実行していなかったら、モーセは死んでしまうところでした。

次に、杖で岩を打って水を出した時、エホバに栄光を帰さなかったことです。このたった一回のミスで、彼は約束の地に入る特権を失いました。

私の研究司会者の兄弟は、聖書中で憐れな人物としてモーセを挙げ、「彼はかわいそうだ」と語っていました。あれだけエホバに忠実に仕えたのに、たった一回のミスで、約束の地に入れなくなったからです。また、割礼の問題で死にそうになったことに対しては、私は「エホバはやり過ぎではないか？」と思うほどです。

## ダビデ

---

ダビデはイスラエル史上最高の王として、エホバの名前を大いに全世界に高めました。しかし、彼がバテシバと姦淫を犯した時、彼はただではすまず、後の日々に深刻なエホバからの裁きが下りました。兵士の数を数えた時もそうです。ダビデの失敗のせいで、数万人のイスラエル人が裁きで打たれましたが、個人的には「やり過ぎではないか」と思うほどです。

後にダビデは、「忠実な王」としてエホバから評価され続けますが、その大前提は、彼が失敗を犯した時にへりくだって悔い改めたからでした。もしそうでなかったなら、彼はすぐに死んでいたはずでした。

## ウジヤ王

---

ウジヤは、ユダヤの王として、際立った成功を収めた人物で忠実な人でした。しかし、その晩年に傲慢になり、祭司の職務に手を出す越権行為を、たった一回行っただけで、らい病にかかり裁きで打たれました。

あれだけ素晴らしい働きを何十年も行ってきたのに、たったの一回の誤りで、取り返しのつかない事態に陥ってしまったようです。

## イエスの言葉

---

こうした事例を観察していくと、エホバの見方としては、多くを委ねられ、エホバに大きな誉れをもたらす人々は、その有益な働きゆえに、罪を大目に見られる、ということはないようです。むしろ、大きな誉れをもたらす重要な人物であればあるほど、たった一回のミスが、深刻な問題とされるようです。またその時のエホバの対応は、正直、私でも理解できないほど厳しい時もあるようです。

しかし、イエスの言葉を考慮すると、やはりこれがエホバの見方であり、原則であるように思えます。

「実際、だれでも多く与えられた者、その者には多くのことが要求されます。そして、人々が多くをゆだねた者、その者に人々は普通以上を要求するのです」(ルカ 12 : 48)

結局のところ、エホバから多くを委ねられた人は、その時点で「エホバの名」を負うことになります。すると、その人の一回のミスが、エホバの名に深刻なそしりをもたらす、ということが、聖書が示す最も重要な視点ではないか、と思われまます。

私は組織から、「エホバの名が重要である」と教えられてきましたので、そのお方の名に汚れをもたらすような行為が放置されているのは、正直良心が痛むのです。これらの聖書中の事例を踏まえると、N 兄弟としては、どのような結論になりますか？N 兄弟の見解を裏付ける、聖書中の他の事例があれば、教えていただければ幸いです。

## 5 : その他 : 違和感を感じたこと

以下の文章が予言ではない、という N 兄弟と M 兄弟のご意見について、実は私はかなり違和感を覚えました。

「本誌は、1914 年の出来事を見た世代が過ぎ去る前に平和で安全な新しい世をもたらすという、創造者の約束に対する確信を強めます。」

この文章が予言ではない、ということの根拠について、兄弟たちは「預言解釈は徐々に光が与えられていく」「動機は悪いものではない」という点を指摘されました。

上記文章が、断定的な予言としか思えない、という点は、既に触れましたが、もう一つ感じた違和感は、「未信者の方々がその説明で納得するのか？」という点です。「徐々に光が増していく」という説明が筋の通ったものであるとしても、それを理解しているのは、あくまで内部の信者だけです。毎月目ざめよ！誌を読む世界中の未信者の読者は、そんな前提については何も知りません。だから、その雑誌を読んだ時に、間違いなく「1914 年の出来事を見た世代が過ぎ去る前に平和で安全な新しい世をもたらすのがエホバの約束」だと判断します。

そして、明らかにその世代が過ぎるころになると、「エホバは約束を守らない神だ」と判断され、その未信者はつまづき、至高の神の名が汚されます。後になって、つまづいた人々に対して「いや、あれはあくまで断定的な意味ではなく、光が増していく過程なんだ」と説明しても、「ではなぜ、創造者の約束と言い切ったのだ」と言われ、謝罪を求められるのがオチです。

つまり、世界中の未信者の読者に対して大々的に宣言した予言がその通りにならなかった場合、「光が足りなかった」という内部の信者にしか理解できない説明・論理を持ち出しても、それはかえって「私たちが道理に反していることが明らかになる」だけであって、「あなた方が道理をわきまえていることがすべての人に知られるようにしなさい」(フィリピ 4:5) というパウロの言葉に従っていることにならないと思うのです。

それで、私がこの点で兄弟にご確認させていただきたい点は、断定的に示された予言がその通りにならなかった場合、「光が足りなかったから仕方がなかった」という説明と、「断定した予言がその通りにならず申し訳ありませんでした」という説明とでは、どちらが目ざめよ！誌の読者、とりわけ未信者の読者を納得させるものとなるかどうかについて、改めて N 兄弟のご意見を確認させていただくことはできますでしょうか？